

青年期の進路選択に関する社会心理学的研究 —H21 年度大間高校卒業生の半年—

弘前大学人文学部現代社会課程
社会心理学研究室 中田和道

1. 目的と背景

近年若者の進路をめぐる状況は大きく変化している。経済の悪化により高卒労働市場が縮小を続ける一方で進学率が上昇したが、高学歴で一流企業へ就職すれば一生安泰という「学歴神話」が崩壊し¹、卒業後フリーターやニートになる若者が増加²している。そしてこのことは就職・進学といった一時点の進路選択の問題だけでなく、保護される立場から自立し一人前の大人へと移行するプロセス上でもさまざまな問題を生んでいる。

細江(2010)は昭和 39 年(1964 年)の下北半島出身中卒者を対象に 45 年に及ぶ追跡調査を行い、高度経済成長期から現在にかけて移動、転職を繰り返しながら「一人前」になる職業的社会化の過程を追った。細江(1985)によると昭和 39 年(1964 年)の下北半島出身中卒者の進路選択は自己選択の余地は少なく、学校や家族の意向が尊重されていたという。彼らの多くは金の卵として集団で大都市の商店や企業に就職していったが、成人期にかけてライフサイクル上の困難が生じると転職やUターン、起業などさまざまな分化によって適応してきた。しかし、細江の研究は高度経済成長期中卒者を対象としており、平成 22 年の現在とは社会構造や進路状況・価値観などが大きく異なり、進路選択時の心理や行動も変化していると考えられる。

そこで本研究ではH21 年度大間高校卒業生における進路選択の経緯と就職先や進学先での経験から、彼らがどのようにして社会に適応していくのかその過程をたどる。そして、高校卒業後半年間で感じる困難やとまどいの中で家族や周囲の人に支えられながら等身大の努力で懸命に生きる大間高校卒業生の姿を記述する。本研究の目的は、現代の地方出身者の進路選択と社会化のプロセスをH21 年度大間高校卒業生の半年間を通して明らかにすることである。ここでは、事例を中心に本論文の一部を紹介していく。

2. 対象と方法

対象は青森県立大間高等学校の平成 21 年度卒業生 79 名である。まず、卒業を間近に控えた平成 22 年(2010 年)の 2 月に、進路に関するアンケートを集合調査法で行った。質問項目は進路・卒業後の住所・将来展望など 5 問で回収率は 88.6%(79 名中 70 名)だった。その後、約半年たった 8 月にスノーボール式サンプリングで得た卒業生 13 名に職場・学校・将来展望に関するインタビューを行った。インフォーマント 13 名の属性は女性 9 名・男性 4

¹ 学校基本調査によれば全国の高卒者の就職率は統計を取り始めた昭和 24 年度(1949 年)から昭和 35 年度(1960 年)まで上昇を続け、この年 64%でピークを迎えた後、平成 21 年度には 15.9%まで低下している。一方、大学進学率は昭和 30 年度(1955 年)に 16%まで低下した後、平成 21 年度には 54.3%まで上昇した。

² 2004 年に厚生労働省が発表した『労働経済白書』によると無業者のうち家事や通学、就職活動をしていない 15 歳から 34 歳の若年者が 2003 年の時点で 52 万人にのぼることが明らかになった。

名、進学者 7 名・就職者 4 名・アルバイト 2 名、県内在住 9 名・県外在住 4 名である。

3. 経済的困難のなかで「やりたいこと」を探す若者

大間高校平成 21 年度卒業生は進学者 43 名、就職者 33 名、進路未定者 3 名の計 79 名であった(うち就職進学者 1 名)。進学者は女子が多く、就職者は男子が多い。進路アンケートの結果から卒業後の住所と進路の関係を見てみると、県内在住が 29 名、県外在住が 41 名いるなかで、青森県と神奈川県に住む人は就職者が多く、北海道と宮城県に住む人は進学者が多かった。県内で地元周辺に住む人は就職か進路未定で、県の都市部には進学で行く傾向がみられた。

そして、事例分析から大間高校卒業生の進路選択に関して 3 つのパターンがみられた。1 つ目は「やりたいこと」に向かってまっすぐ進み、家族をはじめとする周囲の支えの中で進路選択したパターン、2 つ目は明確な将来展望を持たぬまま周囲や学校の水路づけによって進路選択したパターン、3 つ目は経済的な制限の中で、限られた選択肢から自らの自己実現欲求をある程度充足できそうな進路を選択したパターンである。なかでも大間高校卒業生の進路選択に影響を与えるものとして家庭の経済的問題が大きかった。このことは進路選択時における家族の反応からも裏付けられる。子の進路について大間高校卒業生の両親は、基本的には「好きな道に進めばいい」と進路選択にはとくに意見することなく本人の自主性を尊重する傾向がある。このような親の態度は 13 名中 5 名の家庭内でみられ賛成を含めるとじつに 13 名中 11 名の家庭においてそのまま本人の希望を叶える形で進路選択が行われた。しかしその一方、子の進路選択に反対した事例は進学希望の 2 名の家庭でみられ、経済的余裕が少ない家庭では子が進学を希望した場合、親が反対することで親子間に葛藤がおこっていた。そして結果的に、進路選択時に家族の反対にあった者たちは自分の進みたい道に進んだが、学費や生活費に奨学金やアルバイト代をあてることで自分自身の力で経済的困難を乗り越えようとしていた。

4. 「こんなはずじゃなかった」理想と現実の間で揺れる

卒業直前の 2 月に行った進路調査アンケートの追跡調査として、卒業後約半年を迎えた大間高校の卒業生 13 名に職場・学校の様子、友人関係、家族のサポートに関するインタビューを行った。平成 22 年春、希望と不安を胸に卒業していった彼らは半年間で何を感じ、どのような状況のなかで過ごしてきたのか。職場や学校で直面した問題のなかで、友人や家族など周囲の人々の支えによって社会に適応していく過程が彼ら自身の体験から語られた。ここでは、大間原発の作業員として働く M さんの仕事で直面した困難についての語りを紹介する。

「厳しいっていうけど就職はできる。でも就職してからが。厳しいからってわいみたいに適当に決めると後で辞めたりとか。もっとちゃんと考えて自分のやりたいこと決めればよかった。(思ったのと違った?)うん、こんなはずじゃなかった。人生そんなに甘くないなど。高校の時は働いたらお金持ちになれると思ってたけどまったく。お金稼いでも吸い取られてくからなんとか税とか。なんのために仕事してるんかなって。しんどいっす。」

平成 21 年度の高卒就職者内定状況は、前年のリーマン・ショックに端を発する世界同時不況の影響で企業が求人を控え、93.9%(H22 年 3 月末時点)³という過去 7 番目に低い値であった。そのような状況のなかMさんは平成 22 年の春、「原発で働きます。大間にいれるし安定してるんで。」と話しこれから専門的な技能を身につけやっといこうと、希望を持って卒業していった。しかし半年ぶりに再会したMさんの表情からは仕事に対する虚無感や疲労感がにじみ「こんなはずじゃなかった」と理想と現実との大きなギャップに打ちのめされ、仕事を継続していくことに大きな困難を抱えていた。高校在学中の進路選択時に一応は自分のやりたいことを選んで卒業していった彼らは半年間で「こんなはずではなかった」という思いが頭の中を駆け巡るようになっていた。そして人間関係や労働環境、家計のやりくりなど自分の力では改善の見込みが少なく、後戻りできない状況の中で日々葛藤しながら生活している様子が浮き彫りになった。

5. 平成 21 年度大間高校卒業生の半年

本研究では、H21 年度大間高校卒業生の進路選択の経緯、卒業後半年間で直面した問題と生活の変化、そして彼らの持つ将来展望を追跡調査によって明らかにしてきた。本研究によって高校生が進路選択の現場には、急激な求人数の減少や地理的な条件、家庭の経済的問題など本人の努力とは無関係に進路選択に制限を課す要因があることがわかった。このような状況のなか今回話を聞いた 13 名の卒業生たちは、それぞれが置かれた状況の下で自分の希望と家族や学校の意見をすりあわせ、時に葛藤しながら就職や進学など自分自身の「やりたいこと」にむかって進路を選択していた。

しかし「やりたいこと」を自由に選択できる社会の進行は青年期の彼らにある種のとまどいや困難を感じさせることがある。フロム(Fromm,E;1965)はその著書『自由からの逃走』の中で「自由」は近代人に独立と合理性を与えたが、一方個人を耐え難い孤独におとし入れ、人々は自由から逃れ権威主義に依存するとした。その上で個性化・個別化した人間を世界に結びつける唯一の方法として積極的な連帯と愛情や仕事といった自発的な行為を提示した。進路選択においても、自分で選ぶことに高い価値を見出す現代社会では選ぶことは半ば強制され、「やりたいこと」が見つけれない人やできない人にとっては自己のアイデンティティを脅かす事態にもなりうる。さらに、自分の進路を自分で決めるということは、適応に困難が生じた場合自己責任が強調されやすく不安定な状況につながりやすい。そして、地方においては若者が「地元でやりたいことがない」という理由で都市へ流出する大きな要因になっていることも指摘したい。その場合に大きな支えとなるのが家族や友人などのインフォーマル・ネットワークの存在で本研究では特に地元の友人関係によって現状に立ち向かう気持ちを取り戻す事例がみられた。

現代社会において若者たちは自分の「やりたいこと」を自分で選ぶ権利を持ち、時としてそれは圧力となって人生の節目にあらわれる。進路選択を迫られた高校生たちは膨大な職業や学校の中から一つを選び、個人として社会に出ていくのである。そのなかで H21 年

³ 厚生労働省 職業安定局若年者雇用対策室 『平成 21 年度高校・中学新卒者の就職内定状況等について』

度大間高校卒業生は「子ども」から「大人」へと移行する過程でこれまで経験したことのない困難にぶつかり、孤独感や虚無感に打ちのめされそうになりながら等身大の努力と周囲の人々の支えによって半年間を歩んできた。

以上、卒業後半年間という「社会に出る」ことのインパクトを一番強く感じる時期にスポットを当てH21年度大間高校卒業生の奮闘を紹介した。しかし、本論文はあくまでも高校を卒業してから「半年間」の軌跡をたどったものである。「子ども」から「大人」への移行過程は始まったばかりであり、彼らは今後まだまだ大きな問題にぶつかりそのたびに成長しながら乗り越えていくだろう。青年期の進路選択はまだまだ続く。今後も彼らの成長を見守っていきたい。

【参考文献】(要約部分のみ)

- 細江達郎 1985 「下北半島出身者の職業的社会化過程についての再追跡調査研究(Ⅱ)―フィールドノートとケースレポート―」 『トヨタ財団研究助成報告書』
- 細江達郎 山崎剛信 2010 「フィールドノーツ：還暦を目前に人は何を思うのか(Ⅱ)―下北半島出身者への聞き取り調査から―」 『岩手フィールドワークモノグラフ 12号』 岩手県立大学
- Erich Fromm 日高六郎(訳) 1965 『自由からの逃走』 東京創元社